

月刊

地域保健

11
2011

●FRONT RUNNER

大泉町健康づくり課 課長

久保田松江さん

●PEOPLE

白浜レスキューネットワーク

藤藪庸一さん



●特集 東日本大震災

現地活動と支援報告②

久保田松江
さん

● 大泉町健康づくり課課長



相手の心に寄り添えば何をすべきか見えてくる

住民の心のつかみ方とは？ 保健師の神髄とは？

群馬県邑楽郡大泉町

ブラジル人が 多く住む町

群馬県東部、大泉町の保健福祉センターの一角。7ヶ月児健診の会場にはラテン系と思われる親子の姿が目立つ。人口約4万人のうち1割がブラジル国籍という大泉町。ペルー、フィリピンなど他の外国人登録者を合わせるとその数は6213人（平成23年7月31日現在）に上る。外国人比率は全国でもトップ。戦前の中島飛行機にはじまり、戦後は富士重工業、三洋電機など大企業の工場を中心に発展してきた町には関連する中小企業も多い。外国人が多いのは、人手不足に悩む中小企業が積極的に外国人労働者を受け入れてきたことが背景にある。

今月のフロントランナー、久保田松江さんは会場の隅で若い男女と一緒にいた。今日の健診補助に入る「多文化共生インターンシップ」の学生たちと

の打ち合わせということだ。それを終えると、受付係員と二言三言交わり、フロアを忙しく動き回っている。

※群馬大学が大泉町と協働し、学生に多文化共生の職場体験をさせるプログラム。

魔法のような話術

久保田さんが看護職を目指したのは高校生とき。難病の人に接するうちに「困っている人のお手伝いをした」という気持ちが芽生えたのがきっかけ。看護学校に進んだが、注射や処置などの手技には自信が持てない一方で、メンタル面でのケアに関心を持った。ならば人々の心にかかわれる保健師がよいのではと保健師学校へ。実習を通して保健師は思っていたよりもずっと厳しい仕事であることを知ったが、看護の神髄は保健師活動の中にあると感じられた1年間だった。

卒業後、地元の大泉町に就職。先輩は3人いた。そのうち2人は母親くらい年の離れた大先輩で、県内でもやりの保健師として知られた人たちだった。二人は雨の日も風の日も自転車に乗って訪問していたという。

「まったく違うタイプの二人でしたが、どちらも住民の信頼をしっかりと得ていました。人をひきつける話術に優



特集

東日本大震災 現地活動と支援報告

②

今月号では仮設住宅の課題への対処（宮城県石巻市）、
原発避難者受け入れとヨウ素剤配布（福島県三春町）、
専門支援チーム撤退後の現状（岩手県陸前高田市）を
紹介する。また、宮城県東松島市の事例を通して現地
保健師の役割を考察する。さらに全国の保健師に呼び
かけ岩手県大槌町で全戸訪問を展開した鈴木り子さん
（岩手看護短期大学）にインタビューを試み、活動
の狙いを聞いた。



写真は石巻市

P18 仮設住宅の健康課題の解決に向けて

宮城県石巻市の取り組み

◎取材・文 編集部

P30 災害時こそ保健師本来の働きを

大槌町の全戸訪問が目指したもの

◎interview

鈴木り子さん（岩手看護短期大学地域看護学教授）

聞き手 編集部

P38 大災害時における現地保健師の役割

〈調整とマネジメント〉宮城県東松島市の取り組み

◎尾根由紀（東松島市）ほか

P48 突然押し寄せてきた原発避難者

福島県三春町の震災対応

◎取材・文 西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

P60 専門支援チーム撤退がもたらす新たな力

復興へ向かう陸前高田市の今（第七報）

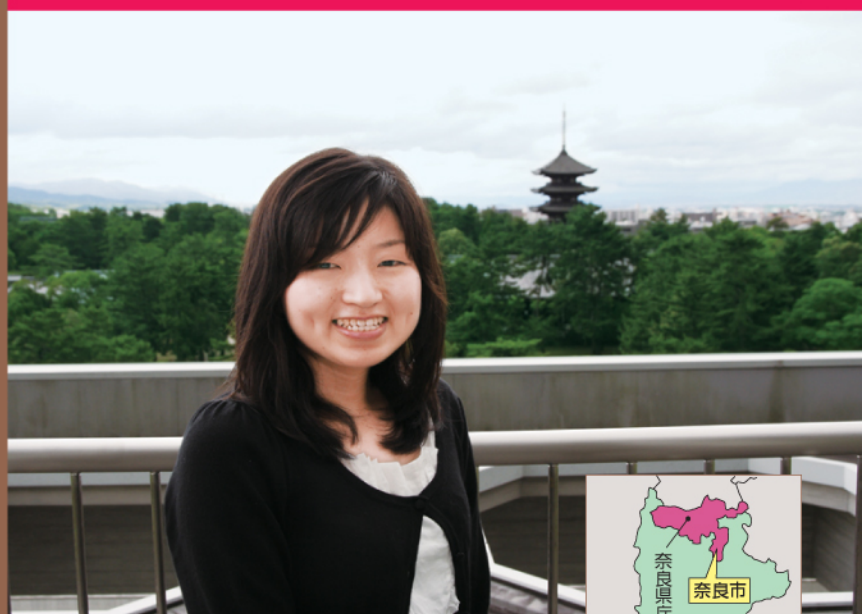
◎佐々木亮平（日本赤十字秋田看護大学）

早く現場に立ち 「保健師」を実感したい

大学院の学びを生かせる日を待ちながら

はた まさこ
秦 麻希子さん

●奈良県医療政策部保健予防課



▲奈良県庁の屋上から興福寺五重の塔を望む



取材・文・写真/西内義雄 (医療・保健ジャーナリスト)

今回は県庁勤務のひよこさんだ。奈良県庁はこれまで何度か訪ねたことがあるので、彼女の存在は知っていた。黙々とデスクワークをしているのが印象的で、話を聞く前から事務仕事の多さは予想していた。そのあたりをどう感じているのか、本庁の保健師の役割と併せて聞いてみたいと常々思っていた。

秦麻希子さんは今年で経験2年目の27歳。父はサラリーマン、母は看護師という家庭の長女として兵庫県西宮市に生まれた。医療職への興味は中学に上がったくらいから持ち始めた。

「当時、母がペインクリニックに勤めていて『今日はこんな人が来て、痛みが強かったのが治療によって良くなるようになったのよ』など、よく患者さんの話をしてくれたのです。それを聞いているうち、自分の母が人を支えている仕事をしていることを誇りに思いま

した。患者さんの日常生活も把握しているということは、信頼されている証だろうとも感じ、看護師という仕事がとてもすてきに思えたのです」

看護師にと勧められたわけじゃない。話を聞いているうちに秦さんが興味を持ったわけだ。しかしまだ中学生なので興味はほかにもたくさんある。部活ではソフトテニスに打ち込み、1年生のときから市内大会で3位に入るとほど活躍した。また、英語が好きになり、高校では英語科のある高校を自ら選んで進学した。

ふたつの思いが 合わさった

看護師になりたい。英語を話したい。このふたつは素直に将来の夢につながった。つまり、英語を使って看護師活動のできる職業に憧れた。そんな娘の姿に母は「あなたにできるかねー、楽じゃないよ、甘くないんだよ」と理

解を示しつつも厳しい仕事であることを助言したという。それでも秦さんの気持ちには変わりはなかった。高校でもソフトテニスに打ち込みながら、看護の道に進もうと決意していた。

目指していたのは看護大学だ。専門学校は即戦力だけど、大学に行けば他の教養も身につく。広くさまざまな知識を学びたいと思っていた秦さんにとって、大学は憧れの場所でもあった。が、希望していた大学の門は開かず、専門学校である大阪赤十字看護専門学校への進学を決めた。

「看護師になりたいという夢は専門学校でもかなえられるので、浪人までしようとは思いませんでした。それに赤十字は国際看護にも強いイメージがありましたし、災害看護にも興味があったので選びました」

と、すぐに気持ちを切り替えて前进了んだ。

*ちなみに、秦さんの妹も現在看護師を